



なかぞめあみだとう 中染阿弥陀堂

基本データ 住所：常陸太田市中染町 23

公開時間	駐車場	写真撮影	スタンプ	トイレ	雨天時の 展示物変更
15 時まで	○	○	○	×	なし

※ 普段は公開していません。 ※ 道幅が狭いので、車での通行にご注意ください。

解説動画 ※通信料がかかります

【文化財解説（中染阿弥陀堂）】文字通り歴史を背負った鉄仏をご紹介します！



中染の文化財

○ てつぞうあみだによらいりゅうぞう
鉄造阿弥陀如来立像

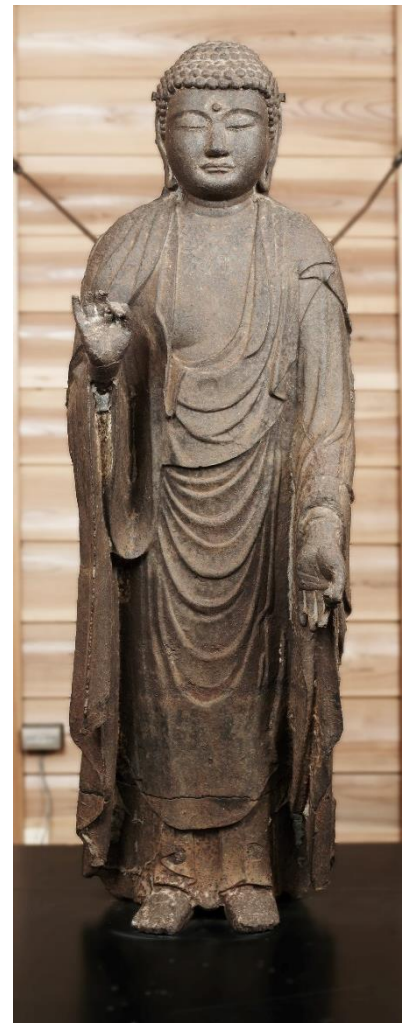
国指定重要文化財（平成 26 年 8 月 21 日指定）

鎌倉時代 弘長 4 年（1264）造像

像高 164.2 cm の等身像の鉄仏です。技術的難易度が高い鉄による
鑄造をおこなうため細部表現は簡略化され、頭部の螺髪は大きく、
衣文も形式化がみられますが、その温かみのある穏やかな表情と、
凛とした姿勢が美しい像です。

鉄仏は鎌倉時代を中心に造られ、関東に多く分布しますが、数が
少ないことから非常に貴重な仏像と言えます。

本像の背面には、^{だいだんな}大檀那（筆頭寄進者）^{とうばら}桐原左衛門、^{だいだいく}大大工（筆
^{ごんのかみにゅうどうさいねん}頭鑄工）^{だいかんじん}権守入道西念、^{そう}僧
^{りゅうぶつぼう}立佛房、^{だいぶっし}大仏師（原型製作者）^{ひゅうがぼうりょうかく}日向房良覚らの名と、弘長 4 年
4 月 26 日の日付を記す銘文が刻まれています（裏面写真参照）。こ
れらの人々の事績は知られていませんが、桐原左衛門は佐竹氏家臣
とみられます。念心・西念といった法名は、一時常陸国に滞在し、
佐竹氏とも親交のあった「親鸞」を中心とした浄土教団とのつなが
りを連想させ、当時常陸国において広く信仰されていた浄土教の影



響下において本像が造像された可能性は非常に高いと考えられます。

なお、背銘にみる「法然寺」については現在までのところ不明ですが、この地、中染にはかつて「花木山^{かぼくさんしょうよういん}勝養院」という寺院があったとされ、その寺号が「法然寺」であった可能性があります。常陸太田市内には同名の浄土宗寺院・法然寺（1337年創建）があり、佐竹一族の「永慶蓮勝^{えいけいれんしょう}」開基とされるところから、両者になんらかの関連があったとも考えられます。

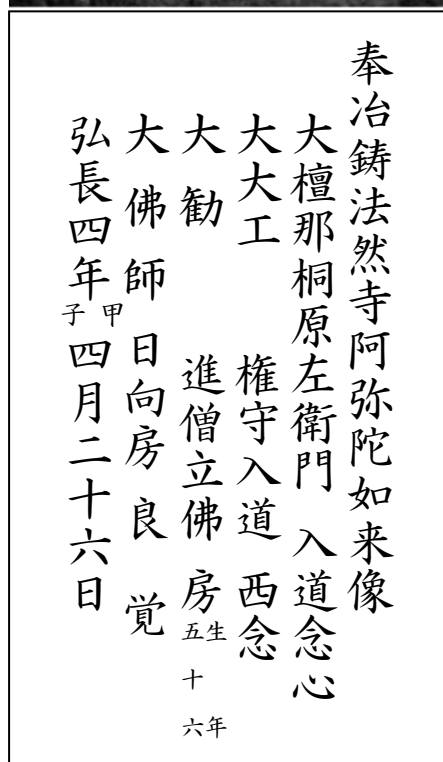
また、東茨城郡大洗町大貫町西光院の本尊・木造阿弥陀如来立像は、中染阿弥陀堂の鉄像を鑄造するにあたり造られた原型であることが明らかとなっています。原型と鑄造品がともに残る例は全国でも数点ありますが、その中で製作年代が判るのは本像のみです。仏師の名が背銘に記されたことは、原型像の制作が本像の造像過程で重要な意味を持っていたと考えられます。

造像の弘長4年（1264）の佐竹氏は、常陸介に任じられた7代長義の代にあたり、朝廷・鎌倉幕府のいずれにおいても自らの地位を確立できた時代でもあります。

実際には弘長4年は、2月28日に改元が行われ、正しくは新年号の文永元年4月26日とすべきところ、なんらかの理由で先に背銘を刻みこんでしまっており、すでに修正ができない状況であったため、旧年号がそのまま記されてしまったものと考えられます。このことから、弘長4年4月26日という日付には、何か大きな意味があったことがうかがわれます。

関連する資料がほとんど失われてしまっているため、本像にまつわる多くのことが謎のままとなっていますが、その姿形、背銘などは鎌倉時代後半の常陸国における仏教と、我が国の仏教美術の変遷を知る上で、極めて重要な位置を占めるとされることから、平成26年8月21日、国指定重要文化財への指定がなされました。

茨城県内における仏像の国指定は92年ぶり。常陸太田市内においては下利員町西光寺の木造薬師如来坐像以来、実に103年ぶりとなります。



鉄造阿弥陀如来立像 背銘

